

職場報告・問題提起

- ・今年度から唐津から博多に転勤して仕事量の多さに戸惑っているが、若手社員とのコミュニケーションを大切にし、良い職場にしていきたい。(車掌区分会 秀島代議員)
- ・「若い人は大変だね」と他人ごとのように言うベテラン組合員が多いとの指摘を受けたが、正直同じベテラン組合員である私も生活は苦しい。現在、職場集会がなかなか開けない。LINEを使って問題点をあげるよう呼びかけているが集まらない。やはり、実際に会って話をしながらでないといけない。久大線の草刈りをはじめ沿線整備を強化して欲しい。近隣住民からのご意見も数多く寄せられている。(久留米分会 佐藤代議員)
- ・ボーナス3期連続の低額回答にもかかわらず、職場の社員からは怒りの声が聞こえてこない。問題意識はあるのか。(新幹線分会 加藤代議員)
- ・筑肥線のホームドア要員を付けて欲しい。故障したときが不安、会社は安全面を考慮しているのか。(博多分会 岩田代議員)
- ・駅では窓口によくの人が並び忙しい。会社は、コロナが落ち着いても元に戻ることはないなどと言っているが感覚としてはかなり戻ってきている。職場から数名出向したため、人員がぎりぎりでも一人でも休みになれば勤務が回らなくなる。(九州本部 原田氏)

青年のひとりごと

「年を取ると知能が衰えるから、勉強は若い頃しておくべきだ」というのは、誰もが信じて疑わない一般論として定着していますが、それは、単に「年とともに体力が落ちるから知能も落ちるだろう」といった単純な思考パターンによるものと思われます。しかし、結論から言うとこれは大きな誤解です。心理学では、知能を「流動性知能」と「結晶性知能」に分けて考えます。流動性知能は、計算のスピードや暗記に関わるもので、これは青年期がピークで、年齢とともに衰えていきます。一方、結晶性知能とは、言語能力や推理力、状況判断能力などにかかわるもので、これらは人生経験に左右されるため、60歳を超えても発達し続けます。そのメカニズムとして、人間は、ある程度の年齢になると社会に出て働くようになり、そこでは生活の手段である「仕事」に関連する知識を「生きるために必要な情報」として選択的に取り入れるという頭の使い方が主流になります。一方で、「ひとり立ち」していない学生時代には、生きていく上で何が必要なかを明確に区別できないため、「学校」から受験や単位取得のために与えられた情報はすべて必要なものと判断するしかなく、それを機械的に覚えるといった頭の使い方をせざるを得ないため、それがあたかも暗記が得意であるかのように見えるわけです。簡単に言うと、年とともに知能が衰えるのではなく、単に興味関心の対象が変化するに過ぎないということです。ところで、「社会人になって勉強する人とならない人では大きな差が出る」といった言葉は誰もが耳にしますが、これは単なる精神論ではありません。私たちが働く上で、希望通りに物事を進めようとするとき必ず会社や周囲の人間との摩擦が生じます。このとき、自分の目の前に出くわした問題を解決するために、必要な情報や知識を積極的に取り入れようとする行動を取れるかどうかが重要になってきます。これは、「自分の欲するもの」に逆らわないか否かの問題であり、自身の幸福度に直接関わってきます。「言っても変わらない」を合言葉に他人の頑張りに水を差すような「事なかれ主義者」が「幸せ」になる道理などありません。